思い草
國學院大學人間開発学部教育実践総合センターだより
第33号
令和２（2020）年12月15日　発行

心に火がついた時こそ教育者の道がスタート

健康体育学科教授　大矢（おおや）　隆二（りゅうじ）

人にものを教えるために学び続けることは容易ではありません。しかし、自分自身が常に熱意と誠意をもって学び続ける姿勢がなければ、真に教えることはできないのです。

学生の皆さんは、在学中に教育インターンシップ、教育実習、部活指導などを通じ、児童生徒（以下、子ども）に教える機会があります。その場面において、「子どもは自分より知識がないから、それほど内容を熟知していなくても大丈夫」と考える人がいるかも知れません。ところが、知識不足は掘り下げた話ができないばかりか、求める答えとかけ離れ、話の深みや広がりが乏しくなることがあります。もちろん、子どもの可能性をひらくには知識だけでは不十分です。問いかける力、教える力、主体性を引き出す力など、さまざまなスキルが必要なことは言うまでもありません。

私は高校の保健授業で不甲斐ない経験をしました。教師になりたての頃です。忙しさを理由に当該分野の勉強や研究を怠って授業に臨んでいた時期がありました。いわば生徒の頭が動いていない学びの浅い授業です。授業を繰り返すごとに情けない気持ちが募りました。この出来事から、教師は相当の学問知識の裏付けが必要であることを痛感したのです。

単に教科を教えるだけでも相当な時間を準備や研究にあてることが必要であり、その積み重ねが子どもの思考を深め可能性をひらくのだと思います。それゆえ、教師は子どもの魂を揺さぶり、深い学びを目指し、１時間の授業をつくるのに何時間もの時間をかけるのでしょう。時間を共にした子どもの反応は、教師が学ぶ端緒を多く含んでいるものです。

教育者を目指す学生たちは、その時代の子どもたちの成長を担う重要なポジションにいることを自覚し、熱意と誠意をもって学び続ける姿勢が必要と考えます。すなわち、自己を成長させるために学びの行動を起こすことです。「よしやるぞ！」と心に火がついた時こそ、学生の大きな目標がスタートしたと言えましょう。

たまプラーザ宇宙の学校の軌跡

人間開発学部助手　堀江（ほりえ）　紀子（のりこ）

たまプラーザ宇宙の学校は、昨年10年目の節目を迎え、10年間でのべ524名の学生が参加している。「宇宙の学校」®はJAXA教育センターとNPO法人子ども・宇宙・未来の会（KU-MA）が実施しているプログラムで、学部創設２年目の2010年に学部活性化事業として認められ、本学部学生をスタッフとして開催することとなった。理科離れや学校教員の理科教育力の低下が現実となっていた当時、学生たちが自然や自然現象を論理的に理解し他人に的確に伝えることができることや、自ら理科教材を考え制作することができることを目指し、理科教育の実践に触れ合う機会を提供しようと、柴﨑和夫教授を校長として、まさに手探りで始めたプログラムである。これらの報告は『國學院大學人間開発学研究』をご参照いただきたい。

多くの学生たちが残していった足跡を辿ってみよう。第１回開催時の学生たちは、先輩がいない分、科学実験教室に対する純粋な興味で参加していた。まずは自分たちで実験を存分に楽しみ、子どもたちにもこの楽しさを伝えたい！と思ってから行動するタイプだった。後輩が入学してくると、今度は後輩にもその楽しさを教え、子どもの試行錯誤を導く宇宙の学校の魅力を伝えてくれた。１年次に児童の前で棒立ちに固まっていた学生は、３年次に代表となり、今では小学校教員４年目となっている。第４回目になると子ども支援学科が創設され、初等・健康両学科生とはまたタイプの違う人懐こい学生たちが、何か面白そうなことをやっていますね、と加わってきた。彼らは開拓精神にあふれ思考の幅が広く、ペットボトルロケットのプログラム開発をして風のように去っていった。子ども支援学科は３年次からは実習が多くなりあまり参加できないのが残念である。ピンホールカメラをやりたい、と言った２人組は原理を徹底的に勉強し、子どもでも作れる設計図を書き、当日はあいにくの曇天だったが、感光紙に風景を写し取ることに成功した。巨大プラネタリウムを計画したときは、通常の光源では星々を明瞭に映し出せないことに気付き、光の勉強から始めていた。学生たちは授業の合間の空き時間に集まっては、学科の壁を越え、失敗したり成功したりして笑い合っていた。なにげない毎日の中で自分たちのやりたいをやれるに変え、子どもたちにさあ一緒にやってみようと、理科の不思議を差し出してきた。当初の宇宙の学校の目的はおおむね達成されてきたと言えるだろう。

今年はCOVID-19に翻弄され開催は見送られたが、学生たちは「たまプラーザLaboratory」というサークルをたちあげ、宇宙の学校の枠を超えた活動の幅を広げようとしている。学生たちの輝きからまだまだ目が離せない。

教育実習

特別支援学校の教育実習

初等教育学科教授　柴田（しばた） 保之（やすゆき）

私は、特別支援学校教諭免許に関する課程を担当しており、本年の実習校訪問はすべて特別支援学校でした。本学部にこの課程が設置されてから４年目を迎えましたが、その際に２年生から履修可能としたので、特別支援学校の教育実習は２年目となります。特別支援教育という考えが生まれる前、盲・ろう・養護学校教諭の免許状取得は、そうした学校で教壇に立つことを前提としていました。しかし、現在、通常学級に在籍する特別な教育的ニーズを有する子どもたちにきちんと向かい合うために、資格を希望する学生が大半を占めています。この課程がそうした学生の実態からスタートしたことはまさに特別支援教育の時代を象徴しているでしょう。

多彩な子どもたちを前に、様々な創意工夫をして研究授業に臨む学生の姿を、この２年間、見させていただきながら、やはり、障害のあるお子さんと向かい合う教育は、教育の原点だということを実感させられます。学生たちが、実習から学んでいることは、何よりも目の前の子どもを一人の人間として尊重するということです。そのためにどの学生も子どもの心に届くように、体と言葉を使って懸命に働きかけていました。子どもがそのメッセージに応えてくれた瞬間は、学生たちには大切な宝物となったにちがいありません。地域の学校で様々な子どもたちに向かい合う時、こうした経験は関わり合いの道しるべとなることでしょう。そして、また、改めて、特別支援学校の子どもたちとともに歩む道を選ぶきっかけともなるかもしれません。

今年は、新型コロナウイルスによって、感染が命の危険に関わる子どもたちがいる特別支援学校での教育実習は、実施自体が危ぶまれるものでした。そのような中で、受け入れをご決断してくださった実習校の先生たちが新型コロナウイルスと向き合う姿からは、教育という仕事が何よりもまず、子どもの命を守るということだということも、強く心に刻んだことでしょう。

教育実習を通して学んだこと

健康体育学科　３年　工藤（くどう） 柚葉（ゆずは）

３週間の教育実習を通して特に学んだことは、授業の中で自分が生徒に一番伝えたいことをどのように理解させるかということです。

最初の授業では、保健でも体育でも指導担当教諭から授業を作る側は自分で全てを把握しているから説明が不十分でも気付かないが生徒からすると何のために、どのような目的で先生から指示されているのかがわからないと指摘されることがありました。自分の授業の様子をビデオに撮ってもらい確認をすると先生方に比べて圧倒的に説明不足でわかりにくいと自分でも感じました。原因として、説明したいことを一気に話していて、この単元やこの実技練習の中で一番のポイントとなるところが明確でないことでした。それから、１つの説明で１つのポイントに絞り、保健のグループワークや体育の練習の際に繰り返し伝えることで生徒の反応も変わってきたのが自分でも感じとれるようになりました。また、いくら指導案で授業を考えても思い通りにいくことはほとんどなく、その都度生徒の反応や進度を確認しながら臨機応変に対応していくことがとても重要だと思いました。指導案の自分で組み立てた授業以外にも他の案を自分の中で考えておきその場で変えていくことがとても難しく、現場の先生方にはさすがだなと思わされる場面が何度もありました。

体育でもグループ活動を取り入れて練習内容を考えさせる授業を行いましたが、男女同じグループでレベルが違うにも関わらず全員が積極的に話し合い考えている姿にとても驚き、生徒の方から提案をしてくれることが多くなり、こちらが学ばせてもらうこともありました。他にも活動中の声かけがとても重要であることを実感しました。体育というのは部活動と違い運動が全くできない生徒もいるので全体の指導とは別に個別での指導の仕方に困惑しましたが、自分が女性であるということを活かして、特に女子に身体を動かしながらフォームなどを指導することを工夫しました。実習での経験をこれからの生活や部活動に役立てたいです。

教育インターンシップ

植物との関わりから学ぶ子どものものの見方

子ども支援学科　２年　岡部（おかべ） 志音（しおん）

私は幼稚園にて教育インターンシップをさせていただきました。全6回という非常に短い時間でしたが、実際に保育に参加し子どもたちと関わる中で、多くの学びを得ることができました。

私が教育インターンシップを行った園は住宅街の中にあり、決して自然豊かだと言える場所ではありませんでしたが、園庭にはそれを感じさせないほど多くの植物が植えられていました。子どもたちは自然豊かな園庭で、植物を利用して遊んだり、植物の周りに集まる虫を探したりしていつも様々な遊びを楽しんでいました。その中で私が最も印象深かったのは「オシロイバナを使った色水遊び」です。ポリ袋に水とオシロイバナの花を入れて揉むと、水がオシロイバナの花の色であるピンク色に染まるため、子どもたちは花を摘むことや袋を揉んで水を変色させることを楽しんでいるようでした。色水遊びは2日にわたって続き、園庭にたくさん咲いていたオシロイバナの花はほとんどなくなってしまうほど子どもたちは夢中になって遊んでいました。さらに、色水遊びをする中で「ピンク色ではなく白色のオシロイバナを入れてみよう」と自ら考え、白色のオシロイバナでも水が変色することに気が付く子どもや、オシロイバナの花がなかなか見つからずに困っている友達に「あっちにお花あるよ」と教える子どもの姿が見られました。

私はつい、植物を鑑賞するもの、彩るものと捉えてしまっていました。しかし、この経験から子どもにとって植物は魅力的な遊び道具であること、さらに、子どもは植物を取り入れた遊びの中で、想像力やコミュニケーション能力を育んでいることがわかりました。

私は教育インターンシップを通じて、このエピソードだけでなく、多くの子どもならではのものの見方に気が付くことができました。保育を行うには子どもの視線に立って物事を捉える必要があります。だからこそ、教育インターンシップでのこの気付きを大切に、今後も保育者になるための努力を続けていきたいと思います。

インターンシップで学んだ こと

子ども支援学科　２年　小松（こまつ） 紗菜（さな）

私は夏休みの５日間を利用して地元の保育園で教育インターンシップを行いました。私のインターンシップ先の保育園では、３歳児と４歳児が同じクラスの縦割り保育であり、最初の３日間は３・４歳児のクラス、残りの２日間は５歳児クラスに入らせていただきました。私はインターンシップを行うまであまり子どもと関わる機会がなかったので、最初は子どもたちと上手く関わることができるか心配でしたが、いざ子どもたちと関わっていくと楽しくてあっという間に充実した５日間が過ぎていきました。

インターンシップでは授業で学ぶことができない体験と、授業で学 んだことを生かす体験ができました。私は授業で学んだ「子ども理解を持って子どもと関わることが大切である」ということを意識して、子どもたちが何に興味を持って遊んでいるのかなど子どもの気持ちを考えて声を掛けていくと、子どもたちも私を受け入れてくれ、沢山の子どもたちと関わることができました。また、授業で年齢ごとの発達や特徴を学んでいましたが、実際に子どもたちと関わってみると自分が思っていたよりもずっと子どもたちの想像力や知識が豊かでした 。5 歳児クラスでは食育の一環として玉ねぎの皮を剥く活動を行っていました。そこで 、女の子が 私に「玉ねぎの皮はここをつまんで取ると剥きやすいんだよ」と教えてくれ ました。先生に教わったのか、毎日剥いているうちに気が付いたのかはわからないけれど、私はそんなことも知っているのかと驚かされました。インターンシップでは座学だけでは分からない現場の空気を実際に子どもと関わることで知ることができ、とても良い体験になりました。

インターンシップを通して、授業で学ぶことができない経験ができたと同時に、授業で学んでいたことが生かされる場面や理解が深まることがあり、自分のこれまでの勉強を証明してくれる経験にもなり 、とても自信になりました。子ども理解に基づいた保育者になるために、これからも向上心を持って学び続けたいと思います。

教師塾　～実践的な指導力や柔軟な対応力を学ぶ～

常に人に支えられている

初等教育学科　４年　大岡（おおおか） 東子（とうこ）

東京教師養成塾では月に２回の講座と報告書作成に加え、年間40日以上、40時間以上の授業実践と月に１度の研究授業を行っています。

養成塾の活動の中で、「自分は常に人に支えられている」ということを強く感じました。めまぐるしい日々の中で、家族や友人、指導教員の先生を始め、養成塾に関わる多くの先生方が様々な面から支えて下さいました。また、１年間という長い実習期間の中で、児童の成長を間近に感じ、素直な笑顔や言葉から、たくさんの力をもらいました。そうして児童と関わる中で、児童からも様々なことを学びました。

本当に多くの人に支えられ、私は今もこうして健やかな心と体で学び続けることができています。支えて下さっている方々に感謝の気持ちを忘れず、教員になってからも学び続けたいと思います。

私のアイ・カレッジ～会いカレッジ～

初等教育学科　４年　山口（やまぐち） 碧（あお）

大学３年生の10月、私は横浜教師塾アイ・カレッジに入塾しました。様々な講座を通して、教員を目指すにあたっての自己課題を把握し、指導教官や仲間との協議で、自分の様々な感情と出会いました。

また、他大学の学生、学校現場で活躍する先生、心から信頼できる教官との出会いがありました。横浜市の教員になるという同じ夢や志をもつ仲間たちと語り合い、自分自身と真剣に向き合うことで毎回新たな発見がありました。新型コロナウイルスの影響でカリキュラム通りにこそいきませんでしたが、ここでも仲間との切磋琢磨や教官の手厚いサポートによって無事教員採用試験に臨むことができました。

嬉しかったこと、うまくいかず悔しかったこと、アイ・カレッジでの多くの学びを胸に、４月からの教員生活と子どもたちとの出会いが今から楽しみです。

たまごプロジェクトを通して学んだこと

初等教育学科　４年　名上（ながみ） 佳祐（けいすけ）

大学３年時に一年間たまごプロジェクトへ参加しました。私が参加した理由は教員の一年間を学校現場に行って体験し、自らが教員になったときどんなことをすればよいのか、どんな力が必要になるのか、教員のやりがいとは何なのかを知りたいと思ったからです。

実際に一年間を通してたくさんの学ぶことがありました。臨機応変な対応力、小さな変化を見逃さない広い視野、子どもたちを引きつける授業力、そしてなにより子どもたちと触れ合うことの楽しさややりがいです。これらの経験は教員採用試験はもちろん、今後の教員人生にも生かすことができるものだったと思っています。

「千葉で先生になりたい」、そんな人は是非「たまごプロジェクト」で色々な経験をしてみてください。

出会いに感謝し、新たな挑戦へ

初等教育学科　４年　石川（いしかわ） 功多（こうた）

私は、子供一人一人の可能性を切り拓く教員を目指し、９カ月間埼玉教員養成セミナーで学んできました。同じ夢を持つ仲間と出会い、切磋琢磨しながら高め合ってきました。セミナーでは、多くの活動が実施され、大学では学ぶことができない経験を積むことができました。各分野の専門家による講義やセミナー生同士が協働して取り組む演習活動では、幅広い視野と専門性を高めることができました。教員の１日の仕事を９ヵ月に渡って体験する実習では、子供と関わりながら、学級経営や授業実践、事務作業など多くの学びと経験を得ました。セミナーを通して、先生方やセミナーの仲間、そして子供達から多くのことを学ぶことができました。そして、失敗や経験から得た学びは、自信へと繋がり、私の宝となりました。出会いと学びに感謝し、４月から日々精進していきます。

教師塾を成長の場に

初等教育学科　４年　本所（ほんじょ） 元哉（もとや）

私は、かながわティーチャーズカレッジに二年間参加した。講師の方々の講義を受け、同じ志を持つ者同士での対話をするという機会は、とても貴重な体験であった。そんな中、実践力向上講座は特に有意義な時間を過ごした。初めての学校に行き、先生方の手立てや学校での取り組みを学ぶことができるのだが、それ以上に子どもたちや先生方とコミュニケーションを取る力がつく機会になったと感じている。また、スクールライフサポーターからボランティアを継続し、先生方の取り組みや子どもたちとのかかわり方についてじっくり振り返る時間を作ることができ、学校現場が学びの場になっていることを実感した。ティーチャーズカレッジに参加したからこそ、経験できたこと、学べたことがたくさんあるので、きっかけがなく悩んでいる学生はぜひ参加してみてほしい。

川崎市が求める教師になるために

初等教育学科　４年　名古屋（なごや） 粋花（すいか）

川崎市の教師塾では、市の特色や実際の現場での問題を生かした講義が多く、日本語指導が必要な児童への対応や人権、ICT教育などについて学ぶことができます。また、川崎教育プランや求める教師像といった川崎市が大切にしていることについて知ることができます。そして、講義で学んだことは演習の時間に活用します。実際に指導案を作成し、教育委員会の方に添削していただくことができる時間もありました。

教師塾での学びを通して、児童のことをより様々な視点から見ることができるようになりました。同じ川崎市の教師を目指す仲間とともに、児童が充実した学校生活を送ることができるよう、これからも学び続けていきます。

今年度のスタッフ

◆教育実践総合センター

センター長　**髙山　真琴**　　副センター長　**田村　学**

担　　当　**小笠原優子　鯨岡　廣隆　岩城眞佐子**

國學院大學人間開発学部教育実践総合センター
〒225-0003　横浜市青葉区新石川3-22-1
電話：045-904-7711　fax：045-904-7709